

吃音症について

荒木中学校 三年 関 崇仁

皆さんは吃音症の方と話したことはありますか。僕がこのテーマを選んだ理由は自分自身が吃音症をもっているからです。そのことが原因で、僕はこれまでからかわれたり勘違いされたりすることが多くありました。僕は皆さんに吃音症の方への接し方について考えてほしいと思います。

そもそも吃音症とは何でしょうか。それは「なめらかに話すことができない状態」のことで、小児期発症流暢障がいともいいます。例えば、話そうとすると言葉がつまり、しばらくたってからしか話し始めることができなったり、最初の音を繰り返して話してしまったりします。百人に五人～八人ほどの発症率であると言われており、それほど珍しいものではありません。僕は小学校一年生のころに吃音症を発症しました。最初はなんにも気にしていませんでしたが、高学年に入ったあたりから自分の話し方がおかしいと感じ始めました。その頃から、からかわれたり、勘違いされたりすることが増え、人とコミュニケーションをとることをできるだけ避けるようになりました。これは僕に限ったことではありません。「吃音を隠すために学校に行きたくない」と考えている吃音症の方は少なくないようです。

僕も以前はあまり人前で話したくないと考えていました。では、なぜ今回吃音症を題材にして皆さんの前で発表することにしたのか。その理由は二つあります。一つ目は、ある友人の存在です。その友人も吃音症をもっているのですが、彼はすすんで皆の前で話す役職に就いたり、授業中積極的に手をあげたりしていました。僕は彼に尋ねました。「皆の前で吃音をだして恥ずかしくないのか」と。彼は「別に恥ずかしくない。何も恥ずかしがることはない」ときっぱり答えました。その時、僕は「自分はなんて小さなことで悩んでいたのだろう」と気づかされました。その時から、僕は少しずつ吃音症を気にせずに話せるようになっていきました。委員会に入ったり、部活動で部長になったり、様々なことに挑戦できるようになりました。「これが自分なんだ」とプラスに考えられるようになったのです。二つ目は、たくさんの人に吃音症のことを知ってほしいと思ったからです。特に、吃音症について知らない人、勘違いしている人に知ってほしいのです。以前、挨拶をしようとした時に言葉がつまり出てこなかったことがありました。その時「挨拶をしなさい」と怒られ、自分の評価を下げられたように感じました。すぐに言葉がでない人もいるとその人が知っていてくれたなら。この経験から僕は、自分が吃音症であると周りに伝え、どう接してほしいのかをしっかりと伝えることも大切だと思うようになりました。また、こうして僕が前で話すことで以前の僕のように吃音症を気にして積極的になれない人の背中を押すきっかけになればとも思いました。

吃音症には確立した治療法はまだありません。しかし、症状を和らげることはできます。例えば、僕は苦手な言葉を別の言葉に置き換えたり、意識してゆっくり話したりするようにしています。他の人が簡単にできる工夫もたくさんあります。例えば、言葉がでてこないときに推測して言葉を出したり、急かさずに余裕をもって話を聞いたりすることです。吃音症の方と話すときに知っておいてほしいことの一つに随伴運動があります。随伴運動とは、発話時に口や喉、あるいは体全体に力が入ることによって起こる行動です。例えば、話そうとして顔をしかめたり、足踏みをしたり、手を叩いたりなどがあります。最初は、この随伴運動を見て驚かもしれません。しかし、この行動は伝えようと頑張っている証拠なのです。だから、この行動を止めさせたり、ばかにしたりするようなことはしないでください。

人には個性があります。吃音症だって、その人の個性なのです。個性は尊重し合うもので、馬鹿にしたり、無理に変えようとしたりするものではありません。

ほんの少しの気遣いで、笑顔になれることがあります。お互いをよく知り、気遣いあうことで、誰もが笑顔になれる社会を一緒につくっていきましょう。